

社寺の参道空間における身体性との関わりに着目した景観体験の特性

The Relationship between Landscape and Physical Experience in the Approach Space of Shrines and Temples

孫 宇琦
SUN Yuqi

キーワード：山岳，社寺，景観，身体性，観光

Keywords: mountains, shrines and temples, landscape, physicality, tourism

1. 研究の背景と目的

人間が「景観」を認識する際、感覚の中で主に使われるのは視覚とされる。しかし、「景観」は視覚中心の体験であるとしても、それは本来的には様々な感覚との繋がりの上で捉える必要があるのではないかと考えられる。ところが、観光に限らず景観体験と身体の他の感覚との関係性についての研究は極めて限られた現状にあるといえる。

日本には、山麓や山腹に建てられた社寺が少なくない。こうした社寺は、現在では容易に到達が可能で、その社殿などの施設のみが観光資源として景観の対象ともなりがちだが、本来的には、社寺は目で見るものだけではなく、重力に逆らい、からだ・身体に負荷をかけて自然や神仏に近寄る参詣の場ということができる。そこで、本研究では、日本の社寺の、参道の空間を対象として、景観体験と身体の関係性を明らかにしたいと考える。

社寺参道における体験の特徴については、岡野(2008)が「幻視システム」と「緩急システム」と称して視覚的な体験と歩行に伴う体験を分けているが、それぞれ視覚体験、歩行体験という身体性に深く関わる体験は独立したものではなく関係があるはずである。そしてその体験と、船越ら(1988)の示す周辺空間の「分節要素」の概念は、身体体験と環境の関係性の存在を示唆するものとして興味深い。さらに、山本(2016)が提案した登山時の身体負荷の指標とする「コース定数」の概念を用いて、参詣者の身体体験状況を把握することができる。

これらの相互関係の検討を通して、観光資源、

観光地でもある参詣空間の価値を捉え直したい。本研究は、参道で体験される景観の特徴を、その参詣に関わる身体行動の変化および空間の分節性と対応させながら明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法と手続き

本研究では、まず視覚体験と歩行体験の関係を把握しさらにその両者と分節点との空間的關係を分析する。即ち視覚と環境・身体と環境のそれぞれの関係性を解明したい。具体的な方法は以下である。

まず文献調査等に基づき、自然信仰・山岳信仰との関わりが深さが知られる社寺の抽出を行った。9つの候補地の中から、軽登山の対象地として観光利用も盛んである、高尾山薬王院および大山阿夫利神社を対象地に設定した。

対象地の環境・景観特性および運動特性を分析するために、抽出された神社の立地概況をGISで把握し、参道周辺の地形等から視覚特性や傾斜特性を解析し、参詣者(本研究では登山のみの目的の人も含む)の行動を予想し、合わせて現地調査の計画を立てる。さらに、標高と歩行ルートの距離からコース定数を算出することによって、参詣に伴う重力による身体負荷を推定する。

最後に、参道の種類・属性・分節点を把握した上で、参詣者の行動を観察・記録する。調査結果で前段階の予想を検証する。

表1 環境・感覚・体の使い方の関係 (高尾山)

	感覚(視覚性)			体の使い方(身体性)		
	可視面積	遠景広がり	参拝対象付近可視性	コース定数変化量	コース定数変化率	行動の多様性
環境(分節点)	A-1					
	A-2					
	A-3	+		+		
	A-4					
	A-5		+		+	
	A-6		+	+		
	A-7		+			
	A-8		+			
	A-9/B-1	+	+			+
	B-2					
	B-3					
	C-1	+	+			
	C-2		+			
	C-3-1		+		+	
	C-3-2					
	C-4	+			+	+
	C-5	+	+			+
	D-1		+		+	
	D-2					
	D-3			+	+	+

+: 顕著に大 -: 顕著に小 グレー部は未調査

【可視面積】みかけの可視範囲面積
 【遠景広がり】遠景の境界の広がり(見込み角)
 【参拝対象付近可視性】薬王院付近の可視性

【コース定数変化量】分節点間のコース定数変化量
 【コース定数変化率】上記歩行距離当たり数値
 【行動の多様性】観察された行動の種類

表2 環境・感覚・体の使い方の関係 (大山)

	感覚(視覚性)			体の使い方(身体性)		
	可視面積	遠景広がり	参拝対象付近可視性	コース定数変化量	コース定数変化率	行動の多様性
環境(分節点)	K-1		+			
	K-2		+			
	K-3					
	ON-1					
	ON-2					
	ON-3	+				
	ON-4					
	ON-5					
	ON-6					
	ON-7					
	ON-8					
	ON-9					
	ON-10					
	ON-11					
	ON-12					
	ON-13	+	+	+	+	+
	OT-1					
	OT-2					+
	OT-3			+		
	OT-4					
	OT-5					
	OT-6					
	OT-7	+	+	+	+	+
	OT-8					
	OT-9					
	SS-1		+			+
	SS-2		+			
	SS-3	-			-	
	HS-1		+		+	
	HS-2		+		+	
	HS-3		+			
	HS-4		+			
	HS-5		+			
	HS-6		+	+		
	HS-7		+			
	HS-8		+		+	
	HS-9		+			
	HS-10		+			
	HS-11		+			+
	HS-12		+			
	HS-13		+			
	HS-14		+	+		
	HS-15		+	+		
	HS-16		+	+		+
	HS-17	+	+	+		
	HS-18		+	+		
	HS-19		+	+		
	HS-20		+	+		
	HS-21	-	+		+	
	HS-22		+			
	HS-23		+			+
	H		+			+
	O		+			+

+: 顕著に大 -: 顕著に小 グレー部は未調査

3. 研究の概要

以上の手順を踏まえて、高尾山薬王院と大山阿夫利神社についてそれぞれ調査を行った調査の結

果に基づいて、分節点ごとに、環境、視覚、体の使い方の間の関係を示す表を作成した(表1, 表2).

高尾山薬王院のコース定数・可視領域・参詣者行動の調査からみると、全体的には緩急・動静が交互する傾向が窺われた。また、C4と薬王院境内では、可視領域が他の場所よりも狭いが、立って眺望する人が多い。C4の場合、男坂・女坂を登った後に体が疲れた参詣者が売店やベンチなどに惹きつけられ、体力回復と同時に、思わず見えた遠い景色を眺めることも多い。こうしたことから、参道の空間構造は参詣者の行為だけではなく、参詣者の体験する景色にも影響があると考えられる。

高尾山と同じように、大山にも注目すべきポイントがある。HS-16の地点には富士見台が設置されており、可視面積は広いとは言えないが、富士山を眺めることができるためと考えられ、コース定数の変化量は高くはないにも関わらず、参詣者の撮影など行為が観察された。一方、HS-18の地点では、視覚の状況やコース定数変化の状況はHS-16とほとんど同じだが、参詣者の行動を観察できず、これは初めて富士山が見えたときに集中し、参詣者が撮影などの行動をするためと考えられる。

4. 結論

本研究は環境(参道の分節要素)・感覚(主に視覚)・体の使い方(歩行など)という三要素の間の関係性を明らかにすることを目的としたものである。これらの関係は、表1と表2における各分節点において、感覚(視覚性)の列と体の使い方(身体性)の列の双方に特徴がみられた部分が、その因果関係は別にして、相互の関連性が観察されたことを示している。

全体として、各分節点において視覚性と身体性の間に関連の見られた分節点が確かにあったが、一方でそうではない分節点もあり、明確な関係が観察されたとまでは言い難い。また条件も異なる二事例のみの結果であるので、ここから一般化や普遍化を行うことはまだできない。しかし観光計画論の立場として、量的には少なくとも観察された関係性を評価しその活用可能性を考察することは意味があると考えられる。■